

東日本大震災に遭遇して



高台の避難所によくたどり着いて、フーと一息、ふと後ろを振り返ると、真っ黒な海の塊が、私の家そして近所の家々もろとも轟音とともに押し流し、また、逃げ遅れた人々が目の前で濁流に飲み込まれるのを見ながら、どうすることも出来なくて…。

本当にあの時の光景は現実のものとは受け止められず、ただただ、茫然と眺めていたのを今でも覚えています。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、私たちの町「大槌町」でも約1,300人の方々が犠牲となり、町の中心部がほとんど流失、地域の尊い絆が引き裂かれ壊滅的な被害をこうむりました。

あの日私は、自宅の裏で家庭菜園の準備をしていたところで、突然の大地震の発生で歩くこともできず、畠の中に座り込んでしまいました。

地震がおさまり携帯ラジオを聴いてみると、当初3mの津波との放送が、その後に10mを超える大津波が襲来するので、早く高台に避難するようにとの放送に変わり、私は妻と近所の高齢者2人を連れて、避難所に指定されている県立大槌高等学校へ避難したのでした。

避難して2日後、私が無事でいることを知った職員が訪ねてきて、会長・事務局長が安否不明である旨の報告があったことから、私自身も長女の安否が確認できないままに妻を避難所に残し、その他の職員と一刻も早く合流することにしました。

甚大な被害状況の中、なんとか職員たちと合流できましたが、そこで見たのは、小規模多機能型居宅介護施設とデイサービスセンター利用者の24人に対して、一緒に避難した職員が、家族の安否・自宅の被害状況も分からぬまま懸命に介護している姿でした。

しかしその時には、この後5ヶ月もの間、職員と昼夜なく一緒に過ごさなければならない多忙極まる日々が始まるに至るとは、夢にも思いませんでした。

まずははじめに取組んだのは、被害状況等の確認でした。皆で手分けして情報収集に走り回り、分かってきたのは、町の中心地は80%以上全壊・流失。高台の神社・学校・集会所及び被災を免れた公的施設等には避難者があふれかえっていました。

役場では町長はじめ40名の職員が犠牲となり、残った職員は避難所の対応に追われて、行政機能は完全に停止状態でした。私たちの社会福祉協議会でも本部事務所のほか隣接する小規模多機能型施設(ケアセンターほっと大町)が全壊・流失したうえ、会長、事務局長、総務課長を含む5名が行方不明となり、施設も人材も失ってしまいました。

唯一残ったデイサービスセンターでは、停電・断水の中、家族や帰る家を失った施設の利用者の介護に追われる毎日で、外部との連絡も不能のまま、社協本来の組織が完全に機能不全となっていました。

このような時（3月20日）、県社協の紹介状を持った災害ボランティア活動支援プロジェクト会議の先発隊という2名の方が訪ねてきて下さり、支援プロジェクトの内容や今後の対応方針について説明を受けましたが、恥ずかしい話ですが、私はその時まで支援プロジェクトなるものの存在は全く知りませんでした。

担当者の説明によれば、27日には県社協をはじめブロック派遣として名古屋市・岐阜県・三重県の各社協から応援のため職員が到着する予定とのことであり、その受け入れ準備が必要とのことでした。

社協としては生活福祉資金の貸付場所とボランティア活動拠点が必要となっており、いろいろ手を尽くした結果、大槌高等学校同窓会館の借用の承諾が得られたことから、支援プロジェクトの応援も頂き、3月25日に災害ボランティアセンターを立上げ、29日からボランティアの受け入れと緊急小口資金の貸付を開始しました。

ボランティアセンターの運営については、活動の長期化も考えられることから県社協の支援を受けながら、大槌町社協の職員をリーダーとして位置付け、ブロック派遣のスタッフがサポートする体制で運営を始めました。その結果、大槌町社協の若い職員たちも経験を積み鍛えられ、3ヶ月後には実質的なリーダーとして動けるようになるなど、大きく育つことが出来たことについて本当に感謝しています。

いろいろなことが次々に起きる中で、会長のご遺体が確認されたこともあり、私は会長職務代理者となりましたが、意思決定機関である理事会・評議員会をなかなか開催できない状況（理事12名中3名死亡・2名が県外避難・評議員は25名中4名死亡・9名が町外、県外避難・体調不良者もあり）が続きました。

やっと8月30日に理事会を開催することが出来て、私は会長に選任されましたが、それまでの間、職務代理者として行ったことについて報告し、了承を得られたものの、果たして私の考えでよかったですのか又別の方法があったのではないかと、今でもいろいろ考えさせられることがあります。

この度の大震災は、被災した人々に、一人では抱えきれない大きな悲しみや苦しみをもたらしましたが、一方で私たちは、全国の多くの人々とのつながりや、支え合いがあることも教えてもらいました。

震災から2年半余りが経過しましたが、6月末には全壊・流失した小規模多機能型施設の移転新築工事が完成し、事業を再開するなど、大槌町社協にもいくらか光が見えてまいりました。

本格的な再建はまだまだ先のことですが、未来に向かって職員一同力を合わせ励ましあいながら、そしてご支援頂いた多くの方々に感謝しつつ、私達の使命である地域福祉の推進に力を尽くしていきたいと考えています。

大槌町社会福祉協議会
会長　　徳田　信也